

# 病理学演習

科目責任者：矢澤卓也（病理学）

## I. 前文

3年生以上の学生諸君は、臨床医学を学ぶにつれ、疾患それぞれの病態生理を理解する上で病理組織像の理解が必要不可欠であることを再認識させられていることと思う。それでは病理学総論で学んだ事柄をただ復習すれば、病理組織像が示す所見を読み取れるようになるであろうか。その答えはおそらく否である。病理学演習では、病理組織画像を供覧しながら参加学生同士が疾患についてディスカッションを行うという、双方向性、相互啓発性の高い演習を行うことにより、疾患について深く思考できる能力を養成したいと考えている。

1年生、2年生の学生諸君は、これから始まる疾患の勉強に心を弾ませていることと思う。諸君らには病理学演習を早期に体験することにより、解剖学や組織学の重要性が体感できると思う。ぜひ、低学年のうちから疾患に対する効果的、効率的な勉強の仕方を学んでおいていただきたい。

## II. 受入可能人数

人数は制限しない（1～6年生）

## III. 担当教員

矢澤卓也（病理学・教授）

矢澤華子（病理学・講師）

柏木維人（病理学・助教）

石井順（病理学・助教）

岩本雅美（病理学・助教）

## IV. 学習内容

正常像と対比する形で病理画像をスクリーンで供覧し、疾患についてのディスカッションを行うことにより基礎医学的事項と臨床医学的事項の統合を図り、疾患への理解を深める。

## V. 学修の到達目標

演習はゼミ形式で行われ、自分自身の言葉で他者に説明し、他者から説明を聞くことにより、その時点での疾患に対する自身の理解度が明確になる。また参加者相互および教員との意見交換を通じ、基礎医学各領域で学んだ事柄を有機的に疾患の臨床像の理解に繋げていく能力が養成される。疾患の基礎的側面の理解が不十分なまま積み上げた臨床医学的知識は、いわば砂上の楼閣のようなものであり、この状況を打破、改善することこそが成績向上に繋がる。

授業の開催日時についてはラインやメールにより参加者と協議して決定する。

## VI. 成績評価の方法・基準

出席状況、ディスカッションへの参加状況により、総合的に判断する。

## VII. 使用する教材・資料など

通常の講義実習で配布された資料、病理学関係の参考書（病理学の講義実習時に推奨した教科書、参考書については、病理学講座内にも用意されている）。

## VIII. 質問への対応方法

随時（病理学教員オフィスまで）

IX. 求められる事前学習, 事後学習

事前学習：事前に通知されるテーマの領域について復習しておき，理解できていない部分を明らかにし，質問したい内容を準備しておく。(1時間)

事後学習：ディスカッションを行なった箇所について各自復習する。(30分)

X. コアカリ記号・番号

医学教育モデル・コアカリキュラム（令和4年度改訂版）

PR-01, PR-02, LL-02, RE-01, PS-01, PS-02, PS-03, IT-03

XI. 課題（試験やレポート）に対するフィードバックの方法

ディスカッションを行うことにより，質問に対する答えはその都度フィードバックされる。

XII. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

\*◎：最も重点を置く DP ○：重点を置く DP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）	
<b>医師としてのプロフェッショナリズム</b> 幅広い教養，利他の精神，医師に求められる品格を身につけ，豊かな人間性を育み，他の医療者と協調して，多様な価値観を尊重する全人的な医療を実践できる	
<b>能動的学修能力</b> 医学知識・技能を主体的に学び，情報・科学技術を活用して，生涯にわたって自ら問題を発見し，解決することができる	◎
<b>地域医療の理解</b> 地域社会における医療の役割と，その中核を担う意味を理解できる	
<b>国際性</b> 国際社会における医学・医療の動向や課題を理解し，課題解決に向けて行動することができる	
<b>リサーチマインド</b> 研究活動における積極的な創造・発信に挑み，医学・医療の進歩に貢献することができる	